

「外郎売り」練習原稿

言声力アッププロジェクト by ふじこ

第一節

せっしゃおやかたともうすは、 おたちあいのうちに、
拙者親方と申すは、 お立会の中に、
ごぞんじのかたも ござりましょうが、
御存じのお方もござりましょうが、
おえどをたつて にじゅうりかみがた、
お江戸を発たつて二十里上方、
そうしゅうおだわら いっしまちを おすぎなされて、
相州小田原一色町をお過ぎなされて、
あおもものちょうを のほりへ おいでなされるれば、
青物町を登りへおいでなされるれば、
らんかんばし とらやとうえもん
欄干橋虎屋藤衛門、
ただいまは ていはついたして、えんさいとなのりまする。
只今は剃髪致して、円齋と名のりまする。
がんちょうより、おおつごもりまで、おてにいれまする このくすりは
元朝より、大晦日まで、お手に入れまする此の薬は、
むかし ちんのくにのとうじん、ういろうというひと、わがちょうへきたり
昔ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、
みかどへ さんだいのおりから、このくすりを ふかくこめおき、
帝へ参内の折りから、この薬を深く籠め置き、
もちゆるときは いちりゅうずつ、かんむりの すきまより とりいだす。
用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出だす。

よってそのなをみかどより、とうちんこうとたまわる。
依ってその名を帝より、とうちんこうと賜わる。
すなわちもんじには、いただき、すく、においとかいて「とうちんこう」ともうす。
即ち文字には「頂き、透く、香い」と書いて「透頂香」と申す。
ただいまはこのくすり、ことのほか せじょうにひろまり、
只今はこの薬、殊の外、世上に弘まり、
ほうほうに にせかんばんを いたし
方々に偽看板を出だし、
いや、おだわらの、はいだわらの、さんだわらの、すみだわらのと、
イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、
いろいろもうせども
いろいろに申せども、
ひらがなをもって「ういろう」としるせしは、おやかた えんさいばかり。
平仮名をもって「ういろう」と記せしは、親方円齋ばかり。
もしや おたちあいのうちに、あたみかとうのさわへ、とうじにおいでなさるるか、
もしやお立会いの中に熱海か塔の沢へ、湯治にお出なさるるか、
または いせごさんぐうの おりからは、
または伊勢御参宮の折からは、
かならず かどちがい なされまするな。
必ず門違いなされまするな。
おのぼりならば みぎのかた、おくだりなれば ひだりがわ
お上りならば右の方、お下りなれば左側、
はっぼうが やつむね、おもてが みつむね ぎょうくどうづくり。
八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り。
はふには きくにきりのとうの ごもんをごしゃめんあって
破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あって、
けいすただしき くすりでござる。
系図正しき薬でござる。

第二節

いや さいぜんより かめいの じまんばかり もうしても、
イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、
ごぞんじないかたには、しょうしんの こしょうのまるのみ、しらかわよふね、
ご存知ない方には、正身の胡椒の丸呑み、白河夜船、
さらば いちりゅう たべかけて そのきみあいを おめにかけてみましょう。
さらば一粒食べかけてその気味合いをお目にかけてみましょう。
まず このくすりを かように いちりゅう したのうえに のせまして、
先ずこの薬をかように一粒舌の上のにせまして、
ふくないへ おさめますると いや どうもいえぬは、
腹内へ納めまするとイヤどうも言えぬは、
い・しん・はい・かんが すこやかになりて
胃・心・肺・肝がすこやかになりて
くんぷう のんどより きたり、こうちゅう びりょうをしょうずるがごとし
薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し。
ぎょちょう・きのこ・めんるいの くいあわせ、
魚鳥・茸・麺類の食べ合わせ、
そのほか、まんびょう そっこうあること かみのごとし。
その外、万病速効ある事神の如し。
さて、このくすり、だいいちのきみようには、
さて、この薬、第一の奇妙には、
したのまわることが、ぜんごまが はだして にげる。
舌のまわることが、銭独楽がはだして逃げる。
ひよっと したが まわりだすと、やもたても たまらぬじゃ。
ひよっと舌がまわり出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。

第三節

そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきたわ、まわってくるは。
そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきたわ、まわってくるわ。
あわやのど、さたらなぜつに、かげさしおん、
アワヤ喉、サタラナ舌に、カ牙サ歯音、
はまの ふたつは しんの けいちょう、かいごう さわやかに、
ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、
あかさたな はまやらわ、おこそとの ほとよろを。
アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロワ。
ひとつ へぎへぎに へぎほし はじかみ、ほんまめ ほんごめ ほんごぼう
一つへぎへぎに へぎほし はじかみ、盆豆 盆米 盆ごぼう、
つみだて つみまめ つみざんしょ、しょしゃざんの しゃそうじょう
摘み蓼 つみ豆 つみ山椒、書写山の社僧正、
こごめの なまがみ こごめのなまがみ こんこごめの こなまがみ、
粉米のなまがみ 粉米のなまがみ こん粉米の小生がみ、
しゅす・ひじゅす・しゅす・しゅちん、
繻子・ひじゅす・繻子・繻珍、
おやもかへい こもかへい、おやかへい こかへい こかへい おやかへい、
親も嘉兵衛 子も嘉兵衛、親かへい子かへい 子かへい親かへい、
ふるくりのきの ふるきりぐち、あまがっぱか ばんがっぱか、
古栗の木の古切口、雨合羽か番合羽か、
きさまの きゃはんも かわぎゃはん、われらが きゃはんも かわぎゃはん、
貴様のきゃはんも皮脚絆、我等がきゃはんも皮脚絆、
しっかわばかまの しっほころびを、みはり はりながに ちょと ぬうて、
しっ皮袴のしっほころびを、三針はり長にちょと縫うて、
ぬうて ちょとぶんだせ、かわらなでしこ のせきちく、
ぬうてちょとぶんだせ、河原撫子 野石竹、

のらによらい のらによらい みのらによらいに むのらによらい、
のら如来 のら如来 三のら如来に六のら如来。
ちょっとさきの おこほとけに おけつまずきやるな、
一寸先のお小仏に おけつまずきやるな、
ほそどぶに どじょ によろり。
細溝にどじょによろり。
きょうのなまだら ならなままながつお、ちよとしごかんめ、
京の生鱈 奈良生学鯉、 ちよと四五貫目、
おちゃたちよ ちゃたちよ ちゃつと たちよ ちゃたちよ、
お茶立ちよ茶立ちよちゃつと立ちよ茶立ちよ、
あおたけ ちゃせんで おちゃ ちゃと たちや。
青竹茶筴でお茶ちゃと立ちや。

第四節

くるはくるは なにがくる、こうやのやまの おこけらこそう、
来るは来るは何が来る、高野の山の おこけら小僧、
たぬきひゃっぴき はしひやくぜん てんもくひゃっばい ほうはっぴゃっほん
狸百匹 箸百膳 天目百杯 棒八百本。
ぶぐ・ばぐ・ぶぐ・ばぐ・みぶぐばぐ、
武具・馬具・ぶぐ・ばぐ・三ぶぐばぐ、
あわせて ぶぐ・ばぐ・むぶぐばぐ、
合わせて武具・馬具・六ぶぐばぐ、
きく・くり・きく・くり・みきくくり、
菊・栗・きく・くり・三菊栗、
あわせて きく・くり・むきくくり。
合わせて菊・栗・六菊栗、

むぎ・ごみ・むぎ・ごみ・みむぎ ごみ、
麦・ごみ・むぎ・ごみ・三むぎごみ、
あわせて むぎ・ごみ・むむぎごみ。
合わせてむぎ・ごみ・六むぎごみ。
あのなげしの ながなぎなたは、たがながなぎなたぞ。
あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。
むこうの ごまがらは えのごまがらか、まごまがらか、
向こうの胡麻がらは 荏のごまがらか、真ごまがらか、
あれこそ ほんの まごまがら。
あれこそほんの真胡麻殻。
がらびい がらびい かざぐるま、おきゃがれこぼし おきゃがれこぼし、
がらびいがらびい風車、おきゃがれこぼし おきゃがれ小法師、
ゆんべも こぼして またこぼした。
ゆんべもこぼして 又こぼした。
たあぶぽぽ、たあぶぽぽ、ちりから、ちりから、つつたっぽ、
たあぶぽぽ、たあぶぽぽ、ちりから、ちりから、つつたっぽ、
たっぽ たっぽ いっちょうだこ、おちたら にてくお
たっぽたっぽ一丁だこ、落ちたら煮て食お、
にても やいても くわれぬものは、ごとくてつきゅう・かなぐまどうじに、
煮ても焼いても食われぬ物は、五徳鉄弓・かな熊童子に、
いしくま・いしもち・とらくま・とらきす、
石熊・石持ち・虎熊・虎きす、
なかにも とうじの らしょうもんには
中にも 東寺の羅生門には
いばらきどうじが うでぐりごんごう つかんで おむしゃる。
茨木童子がうで栗五合 つかんでおむしゃる。
かのらいこうの ひざもと さらす。
彼の頼光の膝元去らず。

第五節

ふな・きんかん・しいたけ、さだめて こだんな、
鮎・金柑・椎茸、さだめて後段な、
そばきり、そうめん、うどんか、ぐどんなこしんぼち、
そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発知、
こだなの、こしたの、こおけに、こみそが、こあるぞ、こしゃくし、こもって、
小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、小杓子、こ持って、
こすくって、こよこせ、おっとがてんだ、こころえたんぼの かわさき、
こ掬って、こよこせ、おっと合点だ、心得たんぼの川崎、
かながわ、ほどがや、とつかは、はしっていけば やいとをすりむく、
神奈川、程ガ谷、戸塚は、走って行けば灸を摺りむく、
さんりばかりか、ふじさわ、ひらつか、おおいそがしや、
三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、
こいそのしゅくを ななつおきして、
小磯の宿を七ツ起きして、
そうてんそうそう そうしゅう おだわら とうちんこう、
早天早々相州小田原とうちん香、
かくれござらぬ きせんぐんじゅの、はなのおえどの はなういろう、
隠れござらぬ貴賤群衆の、花のお江戸の花ういろう、
あれ あのはなをみて おこころを、おやわらぎゃっという。
あれあの花を見てお心を、おやわらぎゃっという。
うぶこ、はうこに いたるまで、この ういろうの ごひょうばん、
産子、這う子に至るまで、此の外郎の御評判、
ごぞんじないとは もうされまい。まいつぶり、
ご存知ないとは申されまい。まいつぶり、
つのだせ、ほうだせ、ほうぼうまゆに、
角出せ、棒出せ、ほうぼうまゆに、
うす、きね・すりばち、ばちばち ぐわらぐわらぐわらと、
臼・杵・すりばち、 ばちばちぐわらぐわらぐわらと、

はめをはずして こんにちは おいでの いずれもさまに、
羽目を弛して今日お出での何茂様に、
あげねばならぬ うらねばならぬと、
上げねばならぬ売らねばならぬと、

いきせいひっぱり、とうほせかいのくすりのもとじめ、
息勢引っぱり、東方世界の薬の元締め、
やくしによらいも しょうらんあれと、
薬師如来も照覧あれと、
ほほ うやまって、ういろうは、いらっしゃいませぬか。
ホホ敬って、ういろうは、いらっしゃいませぬか。

～memo～